淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十九年三月廿日印刷納本・昭和十九年四月一日發行（毎月十日發行）
第十卷第四號

四月號

安西覺承著
法然上人の和歌
B6版六十四頁　定價五十錢　送料六錢
上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺德の結晶をみる。

增谷文雄著
行誡上人
B6版二百三十頁　定價一圓五十錢　送料十八錢
近世不世出の高僧、謹嚴にしてしかも脫俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

林靈法著
法然上人を憶ふ
B6版四四〇頁　實費三圓（送料共）
著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の內に法然上人の教義をつゞつた。

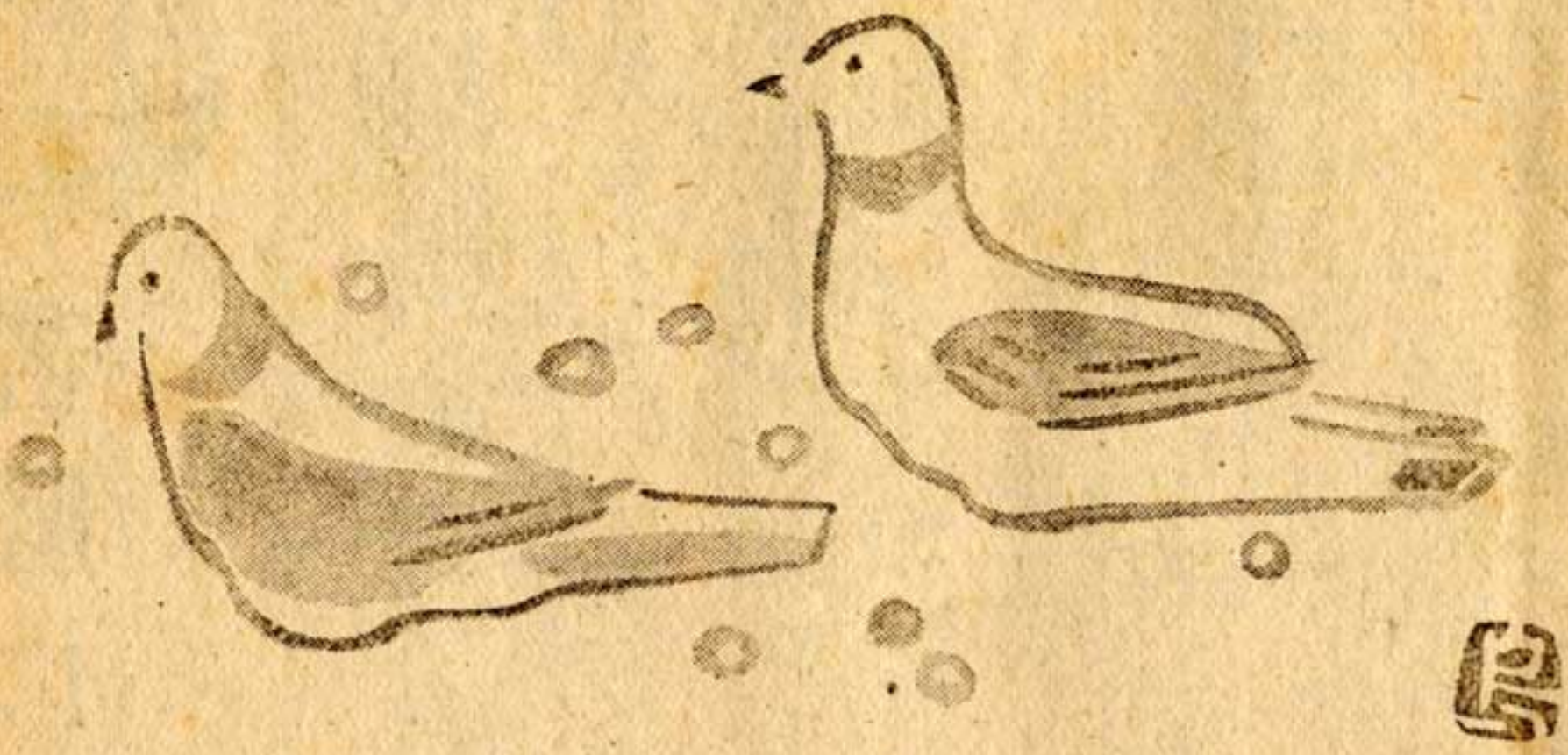
（本會で取次ぎます）

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢增○

淨土　四月號　目次

表紙……鈴木金平・卷頭カット……跡部白鳥
死力を盡す……（一）
苦底に微笑する者……吉田紘二郎……（二）
死の嵐のただ中を……山田靈林……（一〇）
西狹盧雜記　賴朝の祈願……佐藤賢順……（一〇）
手帖（近藤勇のこと）……子母澤寛……（一五）
從軍僧と兵隊……中野隆雄……（一三）
防空の準備を完全に……（一八）
宗教隨筆　とんちん物語……糸山天眞……（一八）
信仰相談……（一六）
俳壇……太田耳動子選……（二四）
法語解說　驕慢心を誡む……中村辨康……（二三）
編輯後記……（二六）

淨土　第十卷第四號



死力を盡す

海軍大佐野村貞（弘化二年生）が軍艦清輝の艦長をしてゐた時、海上で大颶風に遭つた。全員の努力にかゝはらず艦は一晝夜にわたり風に翻弄され、まさに危險に瀕してしまつた。その時野村艦長は疲勞と絶望の色のやうやく濃い總員を集め、六尺ゆたかな巨軀を棒立ちにして、「總員死力用意」と大喝命じた。ために全艦士氣大いにふるひ、つひに死線を突破することができた。

事變以來皇軍の小部隊がよく衆をたのむ敵を引きつけては撃滅するのは、わが將兵の體力や武器が優れてゐたからではない。いかに小勢の部隊でも一度そこを「死守せよ」と命ぜられたなら斷じて守り通さずにおかぬ氣力で勝つのである。南方各地で敵米が悲鳴をあげてゐるのも皇軍のこの力あるためである。

粉骨碎身と口で云ひ、心で決めただけではまだこの力は出てこない。かつての東北地方冷害の際に、ある地方の人々は藁を打つてつくつた藁ベンを食つて大災害を乘り越えた。前歐洲大戰の末期には獨國でも餓死する人がかなりあつた。しかしこの餓死した人達は主として中流以上の、足りた生活に慣れてゐた人達であつたといはれてゐる。

柳生但馬守の言葉に「劍が短かつたならば、一歩敵中に踏み込んで劍を長くせよ」といふのがある。昔から刀で切るには鍔で切れといはれてゐる。この精神あればこそ死中に活をもとめることができ、皮を切らせて肉を切り肉を切らせて骨を切ることができる。

死力を盡せば出來ぬといふことがない。一度でもこうした經驗を持つた人は幸せである。しかし何か特別なことにあはねばこの力は出てこない。現在われわれには死力を盡した時の底力が、まだ尙十分殘つてゐると信じてゐる。

苦底に微笑する者

吉田絃二郎

奈良の唐招提寺を築き、終に日本の土となつた鑑眞大和上は元江蘇省楊州龍興寺の大德であつた。當時日本からの國に留學してゐた榮叡、普照の懇願を容れて、日本へ渡らうとの決心を定めたのであつた。鑑眞大和上五十五歳のをりのことである。

船を造り、海粮を備辨し、いざ出帆といふことになつてもいろいろな災難が湧き、或は海洋に泛かんでは漂流し、難破し、五回目に辛うじて日本渡來の初目的を達することを得た。その時大和上は六十六歳の老齢で、しかも長い航海のために兩眼盲ひて、つひに太陽を仰ぐこともできない有様であつた。殊に最初からいつも隨行してゐた榮叡や、愛弟子祥彦の死といふ悲劇も起こつた。

日本に渡來するために十二ケ年の慘苦を嘗め、如上の悲劇を苦しまなければならなかつた大和上の盲ひたる像が刻まれてあるが、そこには一點の憂鬱さも見出されない。盲ひたる兩眼には溢るゝほどの慈愛が流れてゐる。顔中の筋肉には春の海の溫かさを湛へてゐる。寔に信仰に生きる大德の尊い姿である。

このころは人の心もすさび、何事につけても、親切な心が足らず、惡いことをしても反省することをしない者がある。わたくしの友人できはめて純情な歌人がある。かれはひどく憤慨して「商人は人間に非ず」とまでうたつてゐる。まことに歎かはしいことであるが、かやうな人間が、同胞の中にないとは言へない。これはひとり商人ばかりではない。あらゆる方面の人々に見出すことが出來るであらう。まことに悲しむべき現象である。

こゝでわたくしどもは鑑眞大和上のことを考へて見る必要がある。その航海中の難儀を記して「其後二日物無し。唯急風高浪のみあり。衆僧惱臥す。但普照師のみ毎日食事に生米少し許りを行じ、衆僧に與へて以て中食に充つ。舟上水無し。米を嚼めば喉乾きて咽に入らず。吐けども出でず。鹹水を飲めば腹即ち脹る。一生の辛苦何ぞ此より甚しし

き……人總で水に渴して死なんと欲するに臨む。云々」

航海中の苦難はほゞ想像することができる。ちよつとこゝで注目を牽くのは日本の留學僧榮叡の態度である。船中の人々が、水に渴して死なんと欲するほどの絶望裡に呻吟してゐる際、榮叡は何うであつたか。

「榮叡師面色忽然として怡悅して」と書いてある。いかにもたのもしい、泰然たる風貌がうかがはれる。千幾百年前の日本人には、今日の戰場に於けるわが勇士たちの血が通つてゐた。

鑑眞大和上にしろ、榮叡師にしろ、十二年の慘苦の中に在つても、いさゝかも心を亂したところがない。苦しみが重なれば重なるほど怡悅の狀態に在つた。わたくしども、今日、こゝに學ぶべきところがなくてはならぬ。

不親切、狡猾、無耻、獨善、欺瞞、利己、すべての今日の惡德が、わづかな物の不足、生活の不自由から來てゐるとすれば、千幾百年前のわれ等の祖先に對してまことに耻づべきである。

戰ひの熾烈さにつれて、生活は一層引きしめられるであらう。しかしそれでも第一線の勇士たちに比ぶれば、わたくしどもは贅澤極まる生活をしてゐることになる。

生活がどんなに引きしめられて來ようとも怡悅の風貌を失つてはならぬ。肉體的生活が苦しくなつて來れば來るほど、わたくしどもの心的生活は深さを增し、尊さと光りを增さなければならぬ。

一枚の衣、一椀の食、樹下石上の宿。そこまで落ちてはじめて正覺を成ずることができるのであらう。

戰さがいかにながくつゞかうと、いかに生活が苦しくならうとも、一簞一笠の境涯を覺悟してをれば、迷ふこともなく、恐るゝこともないわけである。この點、日本人の强みであつて、敵國人の到底夢想だに、なし得ないところである。もし、今日、非人間的な日本人がありとすればわれ日本民族の恥であり、日本の戰ふ力を大いに殺ぐものとして排斥しなければならぬ。思想戰といへば敵國側からの謀略のみに對する戰のやうに考へられるが、國民の中の非人間的な不德に對して戰ふことも思想戰の大きな役目でなければならぬ。宗教家教育家の第一義的な仕事でなければならぬ。

裏の畑に行つて土をいぢつてゐると、何時の間にか俗念も消えてしまふ。頭の上の竹の繁みでは雉子鳩が鳴いてゐる。梅はさかりである。鶯も囀つてゐる。山東菜、三寸人參、菠薐草、ふだん艸、小松菜といろいろな種子を蒔いて行く間に日も暮れてしまふ。手足の不自由な今のからだにも、成さうと思へば、何かの仕事はある。

わたくしどもの今日の生活で一番いけないことは無駄話をすることである。口を開くことである。口を閉ぢてゐれば手足も動き、魂も動く。饒舌からは一粒の米も産むことはできない。昔は白い手をした文學青年といふやうな人たちの訪問に惱まされた時代もあつた。今日ではあの青年たちも、議論を捨てゝ、銃を握り、鐵槌を振り上げて戰つてゐることであらう。迷へる青年であつたかれ等自身、今とそ人生に生きる意義を體得したであらう。今の世に於いては母は子に教へられ、師は弟子に導かるゝことになつた。從容として大國難に赴く青年たちの尊い姿を、數年前、はたして誰が想像し得たであらうか。

このころ某大銀行の總裁であつた某氏と逢つた。氏はかつて在職中、貯蓄奬勵の放送演說を試みたが、「私自身果してこんな放送を致す資格があるかと思つた時冷汗が出て來た。だから、一度きりで止めにした」といふ話であつた。

わたくしは氏の良心的な言葉に動かされないわけには行かなかつた。氏の冷汗三斗の思ひをしてゐた際、多くの聽取者には感激してゐる者があつたにちがひない。自らを省みる虛虛な心は必ず人の胸に迫るものを持つてゐる。一番いけないのは得々として語られる口頭禪だ。

加藤莞治氏の話を聽いてゐると、何か知ら明るい希望を感じる。氏の實生活の尊い背景と、誠心、國を憂ふる志士的な熱情が潜んでゐるからであらう。

わたくしたちにはなか〳〵理解しにくいやうな科學者の話などは、却つて氣持ちよく受け容れられる。眞率さがあるからである。

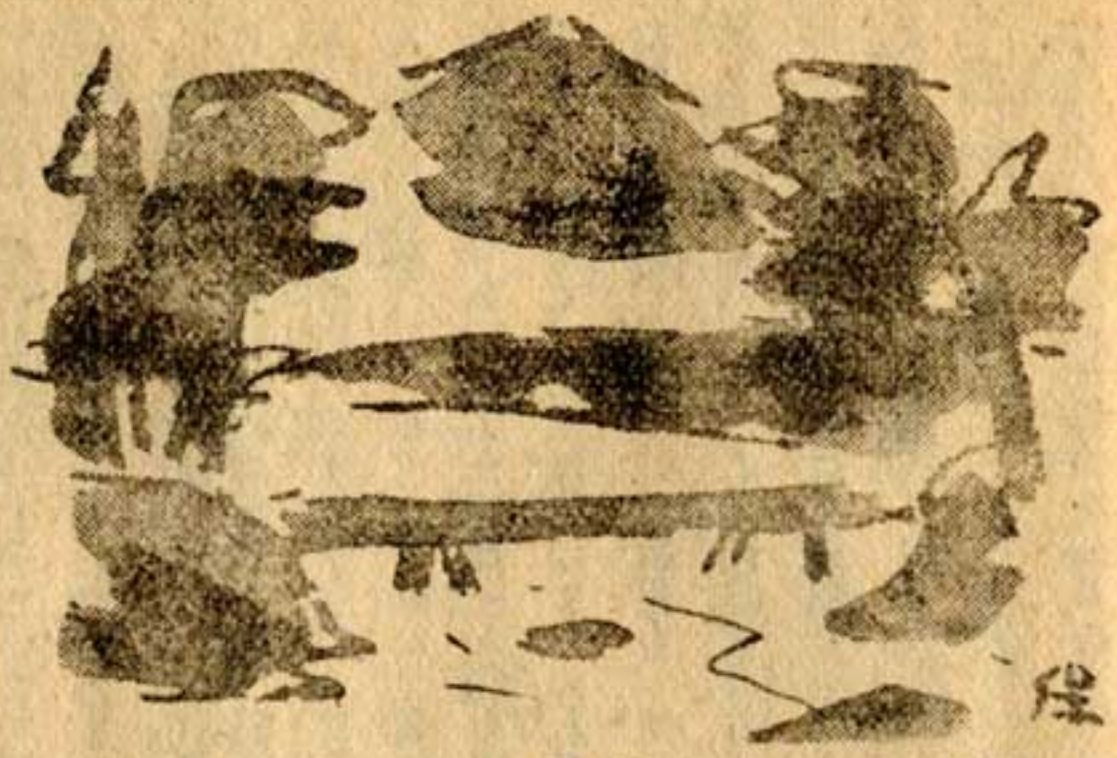
政治家風な人たちの話には同感を持てないものが多い。話を上手にする人ほど嘘がまじつてゐる。身振りたくさんな人ほど、肚に何も持つてゐない。「征つて參ります」とだけ言つて戰線に飛び立つてゆく若い勇士たちに學ばなければならぬ。

今朝の新聞に、ニューギニア戰線に散つた小倉將校斥候長の話が掲げられてあつた。敵重圍の中とて、亡き骸を運ぶすべもなく小倉少尉の右腕を軍刀で斬り取つて持ち歸つた部下の兵士のことなどを讀んでゐると、泪に胸打たるゝ思ひであるが、少尉の墓前にさゝげた部隊長の一首の歌がまたまことに切々の情をとめてゐる。

「手向くべき花もなければ一むらの
　草と濡れたる煙草さゝげぬ」

眞心から溢れ出でた歌は鬼神をも哭かしめる。

送料と振替につきお願ひ
四月一日から雜誌と書籍の送料が改正になりましたので御注意願ひます。
また振替にてお拂込みの場合は必ず十錢增しで御送金下さい。この十錢は當方から貯金局へ支拂ふ分です。



手帖

—近藤勇のこと—

子母澤寛

この頃ある人が、新選組局長近藤勇の借用證を持つて來て、眞僞を見て呉れといふ。住吉甚五右衛門といふ人から金三兩正に拜借したといふ慶應三年九月五日のものである。見ると偽物だ。近藤は多摩郡上石原の百姓の出で學問といふ程のものはない。だから文久三年にはじめて京都へ上つた頃の手紙などはずいぶん拙い筆蹟だが、後ちに新選組局長になるとやつぱり文字のないのが氣にもなり色々恥かしい思ひをしなくてはならぬような事もあつたので、俄かに手習をはじめた。やれ池田屋の斬込だなどゝ畫も夜もない忙がしい中に毎夜二時間は如何なる時でも必らず手習をしたといふ。東州と號したのは、關東武士といふ意味だらう。賴山陽の筆蹟に私淑したのだなどゝ傳へられるが、慶應三年の秋となるともう字もだいぶうまくなつてゐた。この證文はそのうまいのを通り越した達筆で、近藤筆蹟とは似ても似つかぬ。誰か代筆をしたものだらうといふことになれば別問題だが、先づ後になつて誰か物好きのいたづらと見るがいゝだらう。

＊

この頃近藤はこれ迄度々辭退をしたが、遂に六月以來幕府直參に取立てられ、見廻組頭取、元高三百俵、御役料三百俵、併せて六百俵といふ身分で、その外に莫大な機密費を給せられてゐたから、證文を書いて迄金三兩の借金は一寸おかしい。尤も參謀職の伊東甲子太郎が薩摩の大久保一藏と樓脈を通じて脱退するのせぬのといつてゐる際だから、近藤は金がいくらあつても足りなかつたかも知れないので借金などしないと大きな事は云へないが、とにかくこの證文は僞物である。

近藤といふ男は、性來非常に潔癖で、所謂勤王の有志を眼の仇にしたのは、彼等が、その運動を口實に、それ〴〵の方面から金を引出しては、これを湯水の如く遊蕩に費してゐるのを憎んだなどゝ說く人がある位である。ちよいとした話が、彼は夏冬とも毎日新しい晒木綿の肌着を着かへ、着物はよごれても肌着類などは二日と着なかつた程に綺麗好きであつた。そんな風だから、自分の行ひも餘りみつともないような眞似はしなかつたといふ。

＊

金錢の出入なども非常に嚴格で、苟しくも局の費用は一文と云へども私する事をしなかつた。自分がそうだから部下にも嚴格で、ほんの僅かの事でも切腹をさせられたものが幾人かある。隊の勘定方として非常に可愛が

られてゐた擬州高砂の人、河合耆三郎が詰腹を切らされたのもほんの僅かな不正からだつた。

この年の冬、江戸へ引揚げてから甲州へ甲陽鎮撫隊として出發する迄の金錢出入帳が、この頃の生家宮川家に保存されてあるが、それによると、翌四年正月に五十兩會計方から借出をして横濱へ出張した。ここの病院に入つてゐる隊士の見舞に出張した時のものだが、中十二兩を使つてすぐに卅八兩を會計方へ返金し、隊の會計が少し苦しいので却つて自分の貯へ五十兩を出してやつてゐる。

この出入帳を見て、ほろりとさせられるのは、實にその股肱の同志だつた沖田總司が、肺をやんで甲州行に參加出來ず、今日明日をも知れぬ枕前へたづねて金十兩を見舞に與へて行つた事である。隊士達は一人残らず同志のようであつて、また沖田のならぬ人のような感があるが、沖田だけは近藤も、死なば諸共と思つてゐたらう、この同志を残して、しかも勝目のない戰場へ行く近藤の心を考へると同情してやりたい氣持になる。

同じ隊士の島田魁といふ人は後ちに相模の勘進元などになつて地方を歩るいたりしてゐたが、この人が、ある席上で、近藤先生はいつも白い襟の襦袢を着てゐたと語つたところが、舊幕臣の一人が、それは間違ひだらう、舊幕の頃襦袢に白い襟を出せるのは若年寄以上のものであると云ひ、島田は確かにそう記憶してゐますと云ひ返した事がある。

いろ〳〵な生殘りの隊士達やなにかは近藤が最後には若年寄格であつたと語るが、一方ではそれならば如何に瓦解に瀕した幕府と云つても何にか公文の記錄がある筈である、それが何處にも無い、いかに近藤が出世をしても一介の土民から若年寄は當時の制度として信じられないといふ。あんな時だから、記錄などがあつても無くても若年寄格位にはなつたかも知れない、第一甲州乘込の時に長柄の籠に乘替の馬をひかせ、どうしても大名とよりは思へなかつたとその通過した甲州街道の古老達も十年前年者が近藤甲州入を調査に行つた時に云つてゐたから。

古老の話などはあてにならないとしても、僅か四十俵の御家人勝海舟が陸軍總裁と共にやつぱりこの若年寄を命じられて、その時その場で辭退してゐる。あの時になると、老中だらうが、若年寄だらうが、とんと値打が無くなつてゐたのだ。

＊

近藤が最後に下總流山で捕へられたが、捕へた薩藩の有馬藤太と共に馬で粕壁へ行く近藤を追ひかけてついて來た二人がある。有馬は小姓二人と語つてゐるが、云はゞ局長付の隊士といふ譯で小姓と云つて云へないこともない。これは相馬肇と野村利三郎の二人。はじめ近藤が有馬へ停戰を申込んだ時もこの二人が近藤の先きに立つて鐵砲玉の飛んで來る中に双をぐる〳〵輪のように廻し乍ら入つて行つたものである。

二人は双方から近藤の馬の轡をとつて粕壁まで行つた事はわかつてゐるがここからかへされた。隊の永倉新八の手記によれば相馬は御府内浪人、野村は大阪浪人といふことになつてゐる。野村については、後ちに函館へ落ちここから例の甲鐵艦を奪ひ取る爲めに、新選組の殘黨を主力として、南部の宮古灣を襲撃した時に、敵艦へ躍込んで斬死をした事がはつきりしてゐるし、永倉の記錄にも戰死となつてゐる。たゞ相馬については「切腹」とあつてその他の事がわからない。粕壁から一體何處へ流れて行つたのか。

ところが、この程ふと、伊豆の新島の流人帳を調べてゐると、ここに相馬主殿といふものがある。笠間藩の船橋平八郎の伴肇事廿八歳とあつて、流されたのは、明治三年十一月。終身といふことであつたが翌々五年の十一月には御赦免になつてゐる。

これを相馬肇にもつて行くのは、一寸附馬の感無きにしも非ずではあるが、流山の相馬の年配を廿三四とするもののあるのを想ひ出し、また同人は別に主計ともいつたので、どうも同じ人間のような氣がされてならないのだ。只永倉の手記に御府内浪人とあり流人帳は笠間藩であり名の計と殿とが違ふ。

しかもこの時の流人船といふものは十九人乘せて行つたが、百姓二人、無宿二人の外十五人は悉く武士で、郷士一人、外は士族である。上平主税といふ大和十津川の郷士と相馬の外は、徳島藩の士族ばかり十三名だ。翌年にはこの一行中の海部閑六の妻しげが、閑六の介抱付添としてまたこの島についてゐるがこれは有名な徳島藩福士族の新政反對の暴動一件で、流罪者計廿五名、斬罪七名、平瀬伊右衛門以下その他刑を受けたもの八十五名もあつた。

その中に相馬のゐるのは、その事件に加はつたものか、また別個のものか、それもわからない。參考のため記して、御存知の方の御高教を仰ぎたい。

近藤の劍術の師匠は、天然理心流三代目の周助邦武といふ人だが、いろ〳〵きいて見ると、どうもこの人は、何處からか流込んで來て八王寺で小さな饅頭屋をして時にはこれを背負つて賣歩るいてゐたもので、武家では無かつたらしいといふ話がある。別に道場といふものもなく、後ちに八王寺から多摩郡一帶を饅頭箱の代りに道具を引つかついでは出稽古專門に廻り歩いてゐたといふから、身分は大したものでないが、腕は出來てゐたのだらう。一說に神奈川の生れだなどともいふ。

近藤勇といふと、大そうな暴れものゝように思ふが、本人はどちらかと云へば無口でおとなしかつた。京の壬生の故老などの話で、近藤は決して醉つた顏を町家のものなどには見せず大きな聲も立てない。只一度往來でひどく隊士を叱つたのは、その隊士が茣屋から莫を借りて金を拂はなかつたのを知つた時で、この時には、今にもその人を斬りそうで見てゐる方の膽が縮んだといつてゐた。

壬生の隊士達は何分にも諸國のものゝ寄せ集まりだから俗に壬生浪（みぶろ）といつて、弱いものいじめで、買つたものゝお金も拂はないような者もゐたが、近藤は茣屋一件をきいただけでもその態度が察しられる。

＊

京都には妾が二人ゐた。京の女にもてたのは勤皇の志士ばかりのように云ふが、旗本の二男三男で組織した見廻組だの、近藤の新選組だのもなか〳〵持てたもので、しかし近藤の云つた言葉として、妻とするには心第一、姿形は第二の事、妾と爲すは先づ姿形といつたと傳へられるから、この邊のけぢめはちやんとついてゐたようである。

新選組のものは副長助勤以上殆んど公然と妾を蓄へる事が許され、これを休息所と稱して、非番にはここに寢泊りする事を許されてゐた。だから妾ばかりでなく、妻女と一戸を構へてゐた人も多く、京を引揚げて大阪へ行く時は、これらの人達には、凡そ二百兩位の金を與へて前後の處置をさせて、心おきなく戰場へ出立させてゐる。原田左之助などゝいふ男は小粒ばかりで二百兩貰つて旅に入れて持つてかへつて來たといふ。

必勝一つの道

防空の準備を完全に

是非これだけの用意

編輯部

空襲は不意打ちに來るところに特徴がある。しかも敵のねらひは可成の規模をもつて一撃に銃後を攪亂しようとしてゐる。この敵の企圖を破るには、いつどこから敵機がきても、いかに爆彈燒夷彈が降つてきても平然と整々と對處出來る防空必勝の信念がなくてはならない。そしてこの信念は十二分の準備と訓練とがあつてこそ初めて生じてくるものである。

敵機がいつ來るか判らないのに準備と訓練を怠らずにしてゐることは仲々骨の折れることである。英國が戰爭開始と同時にかねてからの防空計畫によつてそれぞれ準備をしたが、一向に獨逸の飛行機が來ないので、つい油斷をし準備をゆるめてしまつた。すると突如獨機の猛爆が始まつて大きな損害を受けたものである。敵の空襲に對しては飽くまで恐れず、侮らず準備の上に準備を、訓練の上に訓練を重ねてゆけば、自づと必勝の信念が固められてくる。

小銃部隊の對空射撃

何よりも水を十分に

さて防空の準備には先づ水の用意が第一である。とにかく水は身近の所に十分に貯へておく。「建物延坪十五坪未滿は百リットル（五斗五升）以上、十五坪以上は概ね十坪につき五十リットル（約二斗八升）の割合で增加する」と用水最低基準量が示されてゐるが、その倍の水が、三倍の水があつても決して無駄ではない。用水の水が全部役にたつと思つたら大變な間違ひである。汲み出す際にこぼれる水がある。火に注ぎそこねる水がある。

また水槽に水があつても、バケツがいたんでゐたり、木で作られてゐるバケツが乾き過ぎて水が洩れるやうでは何んにもならない。

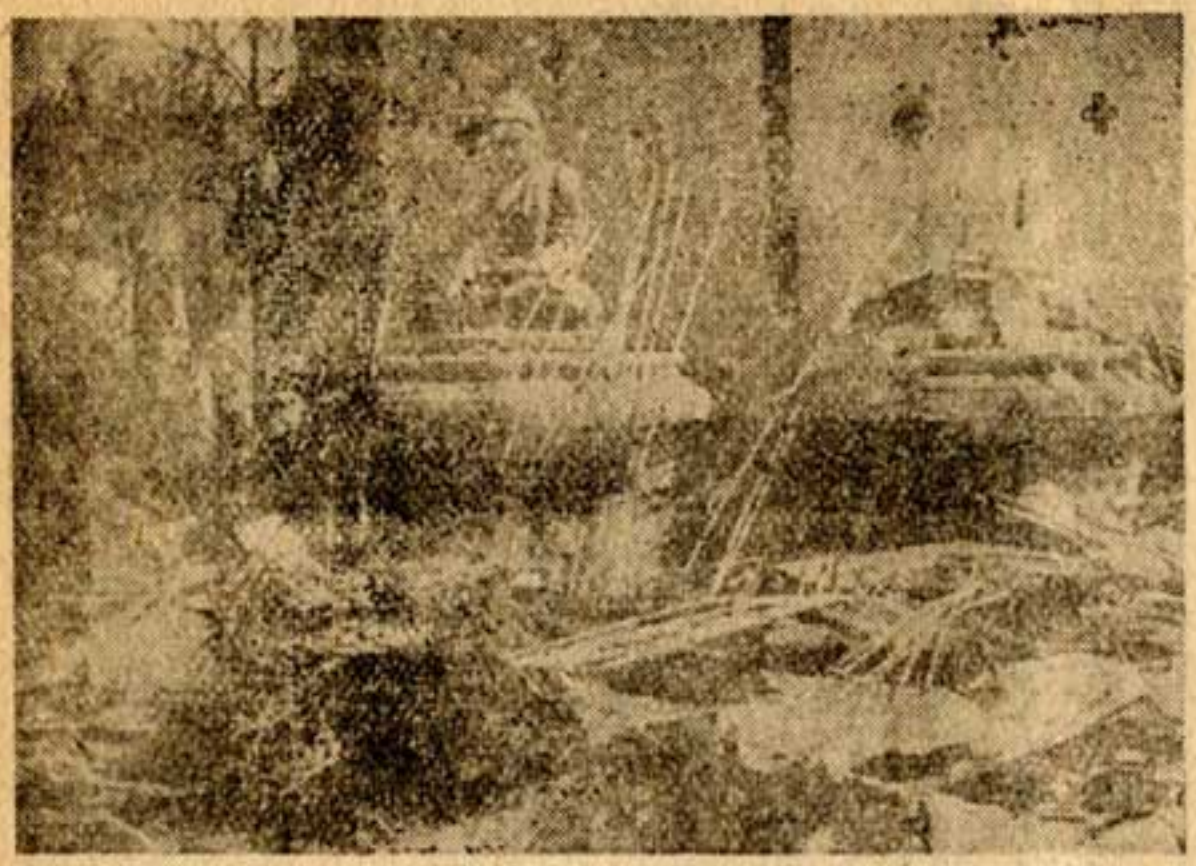
救急資材の一通り

空襲があれば必ず負傷者が出る。一度に多數の負傷者が出れば、家庭や隣組で一應は手當が出來なければ困る。そのために止血法や三角巾の使ひ方も一通りは慣れてゐたいものである。そして救急資材としては、例へば、家庭なら脱脂綿、ガーゼ、三角巾、繃帶、油紙、硼酸軟膏、消毒藥等を、また隣組なら藥品類、應急擔架等を用意してゐないと間に合はぬ。

壕はいつも完全に

爆彈の被害は爆風と彈片によるのであるが、われわれの身體を爆彈の猛威から直接守つてくれるのが防空壕である。自分の身邊に爆彈が落

下した際、この防空壕位目に見えて役に立ち有難いものはない。そして實驗によると防空壕は、大阪市にあるやうな地上に築いたものよりも東京のやうに地下に掘りさげたものの方が遙かに力があり安全である。防空壕の中に塵埃がたまつてゐないだらうか、崩れた土で淺くなつてゐないだらうか。時に掘り直して十分深くしておきたいものである。尙ほんとに壕に待避する際には、壕の上に壁をならべるとか、自分で



ダイ國に於ける敵盲爆の跡

滑團を被るやうにしないと上から降つてくる石や土や木片の被害が防げない。空地をみつけてもつと澤山に壕を掘つておかないと、いざといふ時間に合はぬことがあつたり怪我をしてからでは後悔しても追ひつかない。

家屋内の整理が大切

家の中の整理も大切である。押入れの中に焼夷彈が落ちてもすぐ發見出來ないと困る。障子、ふすま、硝子戸等はない方がよい。これらはない方が怪我のもとにならないし、あれば消火活動の邪魔になる。邪魔といへば塀が一番困ることは演習で再參經驗してゐる。塀は一部だけでも取外せるやうにしておきたい。

非常袋に入れるもの

非常袋の準備は空襲ばかりでなく、普段から必要なものである。小形で背負へるやうにしておき、大人なら八キロ（二貫五百匁）子供なら五キロ（一貫二百匁）位が適當とされてゐる。しかし丈夫なものならいざといふ際にはその三倍位は平氣で背負へるが、しかしなるべく輕く、豫定しておいた方がよい。中に入れる大切なものとしては、衣料切符、食料の通帳、印鑑、財布、貯金通帳、債券類、その他重要書類、貴重品等がある。次に食料品として二食分以上の米、鹽など、衣類としてシャツ、ズボン下、足袋など、手廻り品として手拭、チリ紙、マッチ、ローソク、小刀、針、絲などである。非常袋といつも一緒に用意しておくものに繃帶、三角巾などの救急材料と水筒、辨當箱などがある。これらはまとめていつも一定の所に、寢床の枕元に近い所におかぬといけない。尙またご飯は前の晩に炊いておくことにすればいつもご飯だけは間に合つて都合がよいし、安心である。

防空食糧のいろ〳〵

火事には炊き出しがつきもののやうに、防空も食糧が大切な問題となる。ことに誰も炊き出してくれぬので、自分のことは自分で用意する外はない。しかも携帶に便であり、よく保存が出來るものがよい　そしていざ使用の際はゆつくり煮炊きできないからそのまゝで直ぐ食べられるものが一番よい。米、大豆、麥を焙烙で炒つた炒米、炒大豆、炒麥は簡單に出來てしかも伸々よいものである。ご飯を乾燥した「ほしいひ」もあるが、甘藷や馬鈴薯を蒸してから切つて干した蒸切干は甘くて美味しい。その他乾パンがあれば申し分ないが、また蕎麥粉のやうなものでも便利である。そして備へあれば憂なしの心境でゐたいものである。

頼朝の祈願

佐藤賢順

寺の址といふものは何とも言へず物淋しいものである。特に晩秋か初冬の、雲が鉛のやうに重く垂れて、今にも一時雨きさうな氣配で、殘り惜しさうに木々の梢にこびりついてゐる枯葉を、時々、冷い風が颯々と鳴らして過ぎ去るやうな日の、而も暮れ方であつたとしたら、寺の址に立つた人は、大方泣き出しさうになるであらう。生憎と私が勝長壽院の寺址に立つて、「勝長壽院址」と刻んだ大きな石の碑を眺めてゐたのは、丁度そんな夕方であつた。

勝長壽院址は鎌倉宮へ曲る別れ道を曲らずに、そのまま滑川に沿ふて少し溯つて、右へ曲つた所にある。鎌倉には寺址と言はれるものが、凡そ二十五、六もあるが、その中でも勝長壽院や永福寺は將軍頼朝の創建にかかり、結構壯麗を極めたものであつたことが、昔の記錄によつて窺へる。頼朝も御營所や若公を連れて屢々そこへ參詣して、佛事を營んだのであつた。

古い本に、建久五年の初秋——その頃はもう征夷大將軍には任ぜられるし天下は全く平定するし、名實共に備はる大將軍であつたが——齒痛に惱んで快々として日を暮すことがあつた或る日、氣を晴らすために家臣をつれて勝長壽院、永福寺に參詣して、歸りには滑川の邊を逍遙した、といふ記事がある。この記事には心を惹かれるものがある。といふのは、この川の邊は私も好んで散歩をする所で、曾て、竹の林や山の形や農家の構へなどが、洛北を思ひ出させて、高野川の流れに沿ふて八瀬、大原あたりを復ふてゐる氣がする」と書いたことがある。

頼朝といふ人物について私達が幼い頃から描いてゐる姿は、猜疑心が深く自己一身を守るためには弟の範頼や義經までも謀殺して平氣でゐた武斷政治家の姿であらう。親子だとて油斷がならず、兄弟だといつて敵味方になるかわからぬその頃のことであつたから、猜疑も警戒も謀略も保身のためには止むを得なかつたのであらう。然し頼朝は天下に覇を唱へるためには如何なる手段も選ばなかつたといふただそれだけの人ではなかつた。風懷も詩情も戀哀も解る人であつた。由井ケ濱邊に舟を浮べて歌つたり、永福寺の庭に櫻花を賞したりすることは珍らしくはなかつた。特に敬服せずにゐられぬのは、神佛に對する一すぢの信心である。頼朝の日常は深い信仰心に貫かれてゐて、明け暮れに神に祈誓し佛に回向した。その内容はただの宗教信者のやうに清澄で單純であるとは言へないかもしれない。多面的で複雜であつたが、熱烈で力强く生きてゐた。明日の生死のほども解らぬ武將の常として、一切を神佛の大いなる力に委せた。

勝長壽院は南御堂とも呼ばれ頼朝が父義朝の菩提を弔ふために開創した寺で仕事始めの日には頼朝も御營所の政子もその地に赴いて工事を見分し、その後も何くれとなく指圖をした。文治元年の二月から工事にかゝつて、十月には早くも竣功して、その月の廿四日には嚴かな落慶供養が營まれた。頼朝としては三十九歳の壯氣滿々たる頃で、彼がこの寺の創建に費した精力と財力とは並々ならぬものがあつた。落慶供

養の莊嚴な法會なども鎌倉としては未聞の盛儀であつた。而もそれが、平家討伐に出向いてゐる弟、義經の謀反が傳へられて、鎌倉は騒然としてゐるさなかで、頼朝は落慶供養をすますと、廿九日には義經征伐のために上洛してゐる。かうした愴惶の間にあつても、亡父追善の志が如何に深かつたかが察せられる。

それから五年經つて永福寺の工事が始められるのであるが、この方は奥州の藤原泰衡の精舍を倣ねてその結構を移したので、戰場に相果てた敵味方數萬の怨靈の追善のためといふ發願からであつた。その建築は二階の大堂で、宏莊華麗なること遙かに南御堂を凌いでゐた。起工から丸三年を經て落慶した。「誠に是れ西土九品の莊嚴を東關の二階の梵宇に遷す者か」と古い記錄にある。かうした豪華な佛堂を建てたことは、質素倹約を方針とした武家政治にあつては全く類のないことであつた。それも今は僅かに池の跡と覺しきものが殘つてゐるだけである。

頼朝の信仰は、舊佛教系の信仰を殆んどそのまま受け繼いでゐるやうで、鶴ヶ岡や箱根・伊豆の兩山で行はせた修法は、大般若、法華經壽量品、普門品、仁王經、最勝王經などの讀誦であつた。新興の專修念佛については自分から特にその方の信仰にはいるといふことはなかつたやうであるが、深く心を惹かれてはゐたらしい。よほど後になつてからのことであるが由比の浦邊に老漁夫があつて、別段に病といふほどのこともなく端座合掌したまま聊かも動搖するところがなく息を引きとつたといふことがあつた。その特色々と不思議な往生の瑞相が現れたといふ話を傳へ聞いて、頼朝は早速、家臣を遣はして仔細を尋ねさせたところ、この男は漁業を以て世渡りとしてゐたが、日頃、念佛を信ずること篤く彌陀の寶號を唱へて怠ることがなかつたといふことであつたので、痛く心を打たれて物など與へ、その遺跡で後事を營むやうに命じたことがあつた。

然し頼朝ほどの人物の信心は、獨りの現世安穩や後生安樂を願つてはゐなかつた。常に朝家安穩、萬民豐樂といふ高いところに、祈願の目標が置かれてゐた。大將軍にふさはしい祈願であつた。なるほど彼の信仰は蕪雜で清澄さに乏しいと言はれるであらう。が、朝敵追討、四海泰平といふ大きい目的のためには、凡そ靈驗があると信ぜられるものは、何もかも一つに集められた。誠にひたむきな信心であつた。平家追討は、頼朝にとつては、ただ源平の戰ではない。院宣を奉つてゐる上は、官兵の朝敵追討であつた。この朝敵を速に追討して四海を安泰に置くことこそ、將軍頼朝の願であつた。

頼朝はこのために伊勢大神宮に再々社領を寄進して御願書を奉つてゐるが、その寄進狀の一つで、「右志は、朝家安穩の奉爲、私願成就の爲、殊に忠丹を抽んづ、寄進の狀件の如し」と天朝に對する赤心を披瀝してゐる。

後白河法皇が崩御遊ばされた時の頼朝の悲歎の有樣は「丹府肝膽を碎く」ほどで、御追善の至情を捧げ奉つた。法皇御初七日の御忌日を初め七日七日には、幕府に於いて懇ろなる御佛事を修し奉つた。頼朝自ら七日七日ごとに潔齋し念誦して御回向申し上げたのである。御四十九日には南御堂で、鶴ヶ岡、勝長壽院、伊豆山、箱根山、大山寺その他の衆僧を招ぎして百僧供養を修し奉つた。

翌年の御一周忌の忌辰には實に千僧供養を修して、御菩提を弔ひ申し上げた。鎌倉としては先にも後にもない事であつた。

私は寺の址に立つて、年々七月十五日の夜に怨敵である平家一族の追善のために修せられた萬燈會の盛んな有樣を想像してみたりした。

（西峡廣雜記）

従軍僧と兵隊

中野　隆雄

豚追ひにもなれた兵隊たちは二匹ばかし何處で手に入れたのか、追つて歸へつて來た。

「おゝい、炊事番はいないか」と大聲でどなつた。その際に支那家屋の中から、澤山の兵隊の顏がのぞいた。その内の一つがひつこむと、その顏がニコ〳〵と、笑ひながら家外に出て來た

「ほゝ、すばらしい御馳走だな」

「うん、ひさしぶりに今夜は御馳走だ、おつとそれから、お客さんだぞ」

「誰だい、その客は」

「坊さんだ」

「何に、からかうのも法外にしろ」

「からからもんか、部隊本部に行くと、今朝、配屬になつたといふ坊さんが居るのだ、部隊長の命令で此の隊の英靈を拜みに來るといふので案内して來た、」

炊事當番の兵隊は變な顏をして

「緣起でもねえ、おれ達の部隊に坊主なんか、いるものか」と先つきのニコ〳〵顏が、急に佛頂面になつた。

「その坊さんは何處に居るんだい」

「隊長殿に挨拶するといふんで本部の前でわかれて來た、ぢきにやつてくるだらう」

案内して來た、石上上等兵は、部隊本部で、その從軍僧にあつた瞬間、うれしいやら、妙な氣持やで、挨拶にも戸迷つてしまつたが、話して居るうちに、だいたいひとの好いのもわかつてきたといふ。しかし從軍僧を迎へるのに慰問團を迎へる樣なわけにはゆかない。何れも滿蒙團を迎へる樣なわけにはゆかない。何れもありがたいことにはちがいないが、それに半面には、若干、どころでなく、大變危險がともなふ。前面の敵は相當頑强でも十日間も對陣したまゝの狀態であつて、犧牲者も相當にでてゐる、その中を第一線まで來るのであるから。然し從軍僧は平氣な顏をして、ちゆうちよして居る石上上等兵をうながして來たといふ。

石上上等兵は

「そこで俺も案内する氣になつたんだが、みち〳〵話して見るとさすがに坊さんだけあつてしつかりして居る。自分は緒戰以來從軍して居るので、彈丸にもなれて居るので、ちつともこはくはないと云ふんだ。滿蒙を出でて、間もなく砲聲が聞かれたが、その時も、平氣な顏をして居た。で、大きな事を云ふ、と思つてゐた俺もいささか、思ひなほしたわけさ」

とやうやく紹介の唇を結んだ。

「さういふ立派な坊さんなら、大いに歡迎してやらなくちやいかんな」と云ふものもあつた。

けれど、しばらく沈默がつゞき、やがてひとりの若い兵隊が口火をきつた

「石上上等兵ぢやないが、俺はやつぱり變てこりんな氣持だよ、こんな氣持になるのは惡いか

（カットは從車僧姿の筆者）

もしれないけど」「さうだな、同感だな」と相槌をうつものも現れた。そこへ「こゝですか」と不意に、話題の中心になつてゐた従軍僧があらわれた。

従軍服に巻脚絆、戦闘帽の、僧ともつかないいでたちであつた。中には、これまでに何人もの従軍僧に會つて居る兵隊もあるが、坊さんといふと特別の姿が空想されるのだ、その空想が裏切られて、その點にかへつて親しみが感じられた、といふ事も嘘ではなかつた。

従軍僧は挨拶がすむと、石上上等兵に案内されて支那家屋の中の英靈の前に立つた。静かに頭を下げた従軍僧は、敬虔な態度で英靈の名前を口吟んだ後、おだやかな聲で讀經を始めた。話をする時とは、まるで違つた荘重な聲である。うしろで默禱をさゝげてゐる兵隊達の耳を強くついて居る樣である。

兵隊達は英靈の前に並んだ時、なんとも言へぬ、力強い氣持になつて居た

「來てもらつてよかつたね」

と、石上上等兵に小聲で、つぶやく兵隊もあつた。兵隊達は讀經が始まつて、よけいに同じ感を深くした樣である。彼等の眼の前には、それ〴〵の戰死者の戰死する時の狀景が、あざやかに映じだされてゐたのにちがひない。何れも切々たる面持であつた。

そろ〳〵、ひとの顏もよくわからぬほど、暗くなつてゐたが、そのころから、浙口鎭方面からの敵の砲聲が、再びしだした。それは遠く西南山嶽地帶の敵の砲聲らしい、何れに彈着してゐるのか不明だつた。しかし、兵隊達には、それが偉力のある重砲で、同じ砲彈で、それまでに味方が受けた、損害も、少くない。

「ドラム罐ぢやないか」

と、かなりちかい空を後方へ飛んでゆく音をきいた時、ひとりが傍らの兵隊につぶやいた。

「さうだよ」と石上上等兵は答へた。

三發、四發、五發、六發、巨砲は、いつもは數發でやめてしまふのだが、そのときにかぎつて、なか〳〵やめようとはしない。二、三分おきに、方向を變へて撃ちつゞけてゐるのである

「變だぞ」と石上上等兵まで、暗い外を見た。直撃彈など、滅多にくるものではない、と思ひながらも、さう思ふときはまた、よけいあやぶまれるものである。

外へもれないやうに、英靈の前に灯がともされた。あたりには、そよといふ風もないのに炎だけがゆらめいてゐる。その度に、従軍僧の顏のかげがうごき、あやしげに光つて、凄い。彈着が、だん〳〵近寄つてくるのがわかつて

勳六等に輝く筆者の戰歷

中野隆雄君は昭和十二年七月日支事變が勃發するや直ちに従軍僧を志願し、翌八月には支那駐屯軍司令部附を命ぜられ、同時に第三聯隊配屬となつた。同年九月早くも南苑の戰闘に參加し、山西攻略に従つた。同年十月二十四日のこと山西忻口鎭西方高地の戰闘に際して、頑强に抵抗する敵陣地から射ち出す砲彈の一つが最前線で活躍中の同君近くに炸裂し、ために同君は破片を身に數ヶ所受けて重傷を負つた。依つて野戰病院に收容された。手厚い看護により身體の自由がきくやうになると、再び隊に歸つて、翌十三年二月には河南作戰に參加してゐる。更に同八月には武漢攻略戰に參加し軍戰した。また昭和十四年八月には有名な天津水害に當つて部隊作業に直接従つて働き、昭和十五年八月十五日英靈を護送して內地に歸り司令部附を解かれるまで東奔西走し、よく従軍僧の任務を果した。

同君はその功績により、今般勳六等瑞寶章に叙せられるの光榮に浴したのである。

くると、それへの不安とともに、兵隊達は従軍僧の態度に不審を感じてきた。續けて居る讀經の聲には、少しも變りがなく、といふよりは、いつそう澄んでくるやうに思はれるからであつた。初對面の挨拶をしたときの氣輕さうな、威嚴も何もない印象しかあたへられなかつた彼等にすれば、當然のことかもしれない。

一發、大樹のさけるやうな音が瞬間、天地を覆した。百米とは離れてゐない所での炸裂である。すぐ靜寂がうまれると破片がバラ〳〵と飛んできた。

「……」兵隊達は、やれ〳〵と思ひながら、從軍僧を見た。從軍僧は何事もなかつた樣に、平氣で讀經を續けてゐる、聲にも態度にもなんの變もなかつた。兵隊達は、いつしか、砲彈の音から遠く離れた樣な氣持ちになり、何事もない樣な靜けさで戰友の靈を慰めて居た。

囘向のすんだ、從軍僧を取圍んだ兵隊達は、色々と質問するのである。銃後のありさま、ものに困つてゐるやうなことはないか、鄕里の○○市のこと、何やかやと際限ない。從軍僧は、それにいち〳〵、力をこめて答へた。

食事當番の手で、炊さんしたばかりの夕食が運ばれそれを中心に大きな車座がつくられると、その場の空氣は急に賑やかなものになつた。石油罐の鍋の中から、飯盒のふたに分けつされた味噌汁の中には、たしかに豚の肉がかんで居る　それを見て、思はず唾をのんだのは兵隊達ばかしではない。

「野戰料理も、こゝまで來ると、たいしたものですな、命を惜しがつてちや、かういふものが口にできませんよ」といひ放ち、兵隊達と一緒に食事を始めた。

「兎に角、皆さんの前で威張るわけではありませんが、私も、これでちやんと日本國民としての覺悟はもつてゐます。どんなところへでもでかけて、私は私で頑張りますから、皆さんもひとつ、元氣で、大東亞の敵、正義の敵をやつつけて下さい。口はばつたい事ですが、聖戰、まして今囘の戰爭は、慈悲の戰ひではなくてはならないと思ひます　民族や人種の戰ひとは違ひますからね、東洋平和の爲、大東亞建設の爲の戰ひであり、永遠の平和確立の意義ある戰ひですから聖戰と云はれるのでせう、」と豚汁を一口すゝつて、「いや、とんだお說教になりました、ハハ、、、、」と笑つた。

兵隊達は敵前の事も忘れ、自分達の家で近所の人々と會合をして居やうな、氣輕な氣持で、感心したり、笑つたりして、これが今、戰ひつゝある人々かと思ふ程のゆとりが見受けられる。遠く暗の中から聞える野良犬の聲の間に、遠い砲聲らしいものもきかれたが、それには誰も氣づくものはなかつた。兵隊たちは、氣づいてゐても、默つてゐたものかもしれない。

翌日、從軍僧は、苦力と共に洗顏をする爲、村落露營の場所を出た。村をはなれ小道を苦力と二人で二丁程ある後方の小川のほとりまで來た、數日前の激戰の展開された所であるので、敵兵の遺棄死體が澤山見受けられる、從軍僧は一つ〳〵合掌して通つた、一緒の苦力は、その度に變な顏をして從軍僧の顏を見るのだつた。

午後、砲彈の音の一寸とだへた時を見て、從軍僧は、苦力に手傳はせ、敵の遺棄死體を一ヶ所に集めさせた。新しい土の饅頭の前に、「中華民國無名戰士之墓」と書いた墓標を建てた。

「從軍僧殿、立派なお墓ですな、誰れの墓ですか？」と立ち留まつて、聞いた兵隊があつた。

從軍僧は、ニッコリ笑つて答へ樣とするとき。兵隊は、恐しい顏をして、「なんだ、支那人の墓か、從軍僧殿、こいつらは敵ですよ、私達の戰友を殺した、敵です。こんなやつは鳥か犬に喰はせちやいばよいんです」

従軍僧は笑ひながら、「そうです、につくい敵ですが、死んだら皆んな佛様ですよ、敵も味方もありません、」

兵隊は、わかつた様な、わからぬ様な顏をして居たが、「武道つてやつですか」といつて墓標にピョコンと頭をさげて、小川の方へいつてしまつた。従軍僧は、念珠をつまぐりながら、今建てた墓標の前に立つて、静かに囘向のお經を始めた。苦力は、何んと思つたか、小川と反對の方へ馳出して行つた。私は、ハッと思つたが、そのまゝお經を續けて居た。

丁度、お經の終るじぶん、苦力は手に一ぱい、草花をかゝへて歸つて來た。草花を墓前に供へた苦力は、従軍僧の側にうづくまり、合掌して、「ナミオフタフ〈〈」と念佛を稱へて居る、涙ぐんだ聲は感激にふるへてゐるやうである。私はお經を終へて、横を見ると、見しらぬ支那人が、おそらく、こゝの土民であらうが、立たづんで頭をさげて居る。従軍僧が見てゐるのに氣がついたか、きまり悪るそうに、ペコンと頭を下げて、

「大人、多々的謝々」

といつて更らに、

「大人、豚喰ふか、」と聞いた。従軍僧は、昨夜の味噌汁を思ひだした、「喰べる」と答へると

「何處に居るか」と尋ねた。従軍僧は、ニコニコしながら、駐留地の村を指した　支那人は、「ミンテン、チエン」と行つてしまつた。

従軍僧は、昨日の事を、すつかり忘れて、朝の囘向の爲、支那家屋内の英靈をおまゐりして、無名戦士の墓標の所へ來た。「大人、〈〈」と呼ぶ聲に、ふりかへると、昨日の土民が、二三人の他の土民と、何か擔つて、やつて來る、

従軍僧の前に來て、「進上〈〈」と笑つて居る。見ると、眞白に皮をむいた、豚である。その上に黄色半紙で、「日本軍歓迎」と墨根あざやかに、書いてある。さすがに文字の國であると感心するくらゐ上手に書かれて居る。

従軍僧は、土民達を、早速、部隊長の所へ案内した。部隊長の前へ出た土民は、昨日の事を何囘も、お禮を言ふが、部隊長は、なんの爲に、禮を言ふのか、わけがわからず、面喰らつて居る様である。従軍僧は、すつかりと、昨日以來の事を話をして説明をすると、部隊長は、微笑をして、やつと、なつとくしたらしい。

土民達は協力を誓つて、いそ〈と、日の丸の旗を振りながら、聲高に笑ひながら歸つて行つた。部隊長も兵隊も、いつになく朗らかに、今囘けられた豚を見ながら、「従軍僧殿、御馳走様です」と、大勝した様な喜び様である、おそらく、皆な食事の時の御馳走を思つてゐるのであらう。

今日も又、天氣よく、時偶、澄んだ空をふるはして、あてどない砲彈が飛でゐる事は變りなかつた。

信仰相談（質問歓迎）

擔當　中村辨康

念佛信者が稲荷様を信仰してよろしいか

（問）私は浄土宗を信仰する者ですが、又他にお稲荷様をも信仰して居ります、それでよいものでせうか。又、浄土宗信者としてお稲荷様を拜むときのお經の文句があるでせうか。拜み方をお教へ下さい。（越後・小野塚清）

（答）信仰は一であつてあれも信じこれも信ずると云ふ行き方では結局雜信であつて純一のものでありませんから、むしろ信仰とは云へないと存じます。私は稲荷大明神と云ふ神様の御本體が存じませんが、名前は同じ稲荷神社であつても神社に依つては御本體が違ふものがありはしないでせうか。たとへば豐川稲荷の如きは『吒枳尼天』とか言ふことです。一般には元と吒枳天を祭つたのであつたが神佛分離の時、神社になつた方は「豐受大神」を祭つたり、或は「稲」に關係ある神様を祠つたりしたのですが、それでも以前の「吒枳天」の考へから拔け切らない爲に「お使ひ姫」と稱して狐を付屬神としてまつつて居るやうです。

望月博士の佛教大辭典に依りますと「茶吉尼」は空行母の義であつて、胎藏界曼荼羅には外金剛部院南方闍魔天の左側に安ぜられる三天鬼及び一偃臥鬼の總稱であり、本邦では中古以來之を稲荷の神體として居るとの事であります。而して伴信友の「瞼の杉」に「また京のことと記せる者に、福天神の社、今の一條北堀川の西に福大明神とてあり。稲荷の末社なり。白狐社とも言ふ。白狐と書いてタウカと唱ふとなりさてかの眞言徒の密書なりと云ふものに、陀祇尼天の別號を白晨狐王菩薩ともいひ、稲荷の神體これなりと云へり」と引いてあります。大體は喰人鬼であらうと存じます。人間の手足を喰べながら酒か又は血か知りませんが盃を手にして居るのがその神像ですから恐ろしいです。

お經は眞言系統のもので、大悲空智金剛大教王儀規經、大日經第二普通眞言藏品等を御覽になるとよいさうです。

亡き人のたゝり？

（問）私の娘が病氣で永らく病床に居りますが、餘り永いので「占」に見て貰ひましたら、七年前に死んだ或る知人が障りをなして居るとの事です。その人の事は何時も供養して貰つて居りますのに、またその人のお葬式の時もお坊さんに引導して頂いて、念佛の功德に依つて（導師の）必ず浄土に生れさして頂いて居るものと信じて居りますのに、何うして尚更に回向して貰ひたい爲に娘に障をなすのでせうか。或るお坊さんに尋ねたら「罪障があるからだ」と云はれました。詳しく御教へ下さいまし。御願します。

（盛岡市・三十軒・熊谷榮太郎）

（答）亡き靈が祟りをすると云ふ話はよく出ますが、本當には或る特定な靈が特定な人に特別な祟りをなすことはあり得ないことですが、こちらにそれだけ

の原因があつた場合には「祟りをなした」と同様に見做され得る精神上の影響と云ふか、感動と云ふか、特別な精神的動揺があるわけであります。それは或る靈が特に意識を以て祟りをしたのではないけれども、こちらの精神動揺が謂ゆる「氣がとがめる」と「祟りが有つた」と同じ條件になるからであります。

ですからことさらに囘向して貰ひたい爲に祟りをすると云ふやうなことは有り得ません。若しその靈にそんな功利的な考へがあるならば、それは既に惡魔であつて靈ではありません。靈の力はもつと〳〵公平な姿で現はれる筈であります。若しそんな功利的な考へを持つならば、祟りをなし得るだけの力の附與される譯もありません。靈力と云ふものも失はれるでありませう。ことに何時も供養して居るのに、其上に更に尙ほも祟りをなすと言ふ道理はありません。占などに見て貰ふからそんな「迷ひ」も出て來るのです。そんなことは占者の出たら目であります。何を根據にしてそう云ふことを言ふのでせうか。もつと突込んできいたら、恐らく「神の告げ」とか何とか言つて逃げるでせうが、それでは「夢」であり「世迷ひごと」であつて、覺時のことでないから信用する價値がありませんし、そんな阿漕なことは通りません。ですから決して御心配になることはありません。そんなことで病人の心を惱ますならば治る病氣も治らなくなりませう。病人がそんなことで氣をやまないやうに氣をつけてやつて下さい。傍の者の迷ひから病人にまでいらぬ心配をさせることは、むしろ氣の毒です。

そんな世迷言など云ふインチキな占者の言葉を信じないでどうぞ私の言葉を信じて下さい。

宗旨の異る寺での囘向

（問）私の家のお寺は淨土宗で田舍にあります。此度、私の母が逝去しましてその葬式のとき、近所に淨土宗のお寺樣がないので、天台宗のお寺の御住職樣に來て頂いて拜んで戴きました。それで、ほとけは成佛してくれるでせうか。（東京・近藤美津）

（答）成佛と云ふことの本當の意味を言ふことになると、中々問題はむつかしくなり、お答も面倒になりますから、今それを取り上げることは困難ですが、一般通念の輕い意味から申せば、それは要するに程度問題でありまして、本來ならば感情上からも檀那寺の住職にして頂くのが一番よろしいけれども、事情止むを得なければ、その地方の同宗の御寺を賴むのがよろしいし、同宗のお寺がなければ同じ念佛を奉ずる眞宗とか時宗とか融通念佛宗とか云ふお寺へ賴むのがよろしいし、それらの御寺もなければあなたのなさつたやうに天台宗などお賴みになつてよろしいと思ひます。天台宗は淨土宗臨濟宗曹洞宗日蓮宗等の祖師方と關係の深い宗旨で、念佛にも緣故が深いから全然關係のない宗旨よりはよいわけです。意味は違ひますが天台宗も念佛を用ひます。その意味から言つても比較上ですがよい譯だと思ひます。あなたの問題は比較論であつて事情止むを得ず最善をつくされたのですからそれでよろしいのです。隨つてそれは成佛するかしないかの問題ではなかつたのです。子としての務めをなさつたわけです。いづれおさまる檀那寺で、お納骨の際によく拜んでいたゞいたらよろしいでせう。

宗教隨筆

とんちん物語

糸山天真文
窪田五雲画

今日は豚珍の中學入學試驗合格發表の日です。相當自信が有つた積りですが、さつぱり豚珍の名前が出ておりません。すつかり力を落し、目先が急に暗くなつた樣な思をしてゐると、馳け付けた竹林、「ビリから勘定して便利な成績で、豚ちやんの名が出てゐるよ」と云ふ。賞められてゐるのか、貶されてゐるのか分らない樣な言葉に良く〳〵見ると、成る程ビリから勘定した方が便利な處へ名前がブル下つてゐて、先きの憂鬱は何處へやら。

今が伸び盛り。三年迄持たせる積りで何も大き目にと、ダブ〳〵の服、輝く金ボタン、初登校の嬉れしさです。小學生の前を通る時には何と無く、そりくり返つて歩き度い樣な得意さです。何事も新米、その頃の行儀の良さ、觸はらぬ神に祟り無し、上級生を見ると無暗矢鱈に最敬禮、或日物憂い上級生にうやうやしく御辭儀をすると小使さんだつたり、門衛さんだつたり、聞きもしないのに先輩の竹林が先鞭振つて「あれか、あれは少し驚くと直ぐ闇帳を出す赤鬼、あれがビンタ亂れ飛ぶコンコチ屋の鷲、あれがともン、其他駄馬、痩馬、七面鳥」等と先生の渾名を解說付きで詳細克明に紹介します。

初めは先生に渾名なんか奉つて悪いなと思ひ乍ら、顏を見ると動物園を思ひ出させる樣な渾名そつくりな顏振れで、可笑く、本名は中々思ひ出せぬとも渾名丈けは一遍で明瞭に覺えらるゝその面白さ、その頃からそろ〳〵悪戲が始まるが、まだ何處と無く無邪氣で、餘り質の悪い悪戲はしません。

前の奴の脊中に「此の男賣物」と札をブラ下げたり、腰かけ樣としてゐる者の椅子を引いて轉げるのを悅んだり、先生が居なくなると、教壇に馳け登つて、先生の口振りを眞似て、同級生に「旨めえ〳〵、ソックリだッ」等と喝采を拍してゐた迄は良かつたが、遊び時間に、豆本の議談に有る猿飛佐助の忍術の實演をして跳躍豪から辷り落ちて、遂々腰を拔かし暫らくは氣が遠くなつて仕舞ました。

中々活氣が有つて頼もしいと云ふ柔道の先生、もう少し大怪我すれば性根が據るんだがと人事の樣な事を云ふ生徒監、謹嚴な校長が聞いたら何と云つて叱られるか、ワシは知らんよと半ば呆れ顏で云ふ擔任の先生

四面楚歌の聲ですが、元々自分が悪いのですから、たゞ「濟みません〳〵」と頭をペコ〳〵下げて、あやまるばかりです。

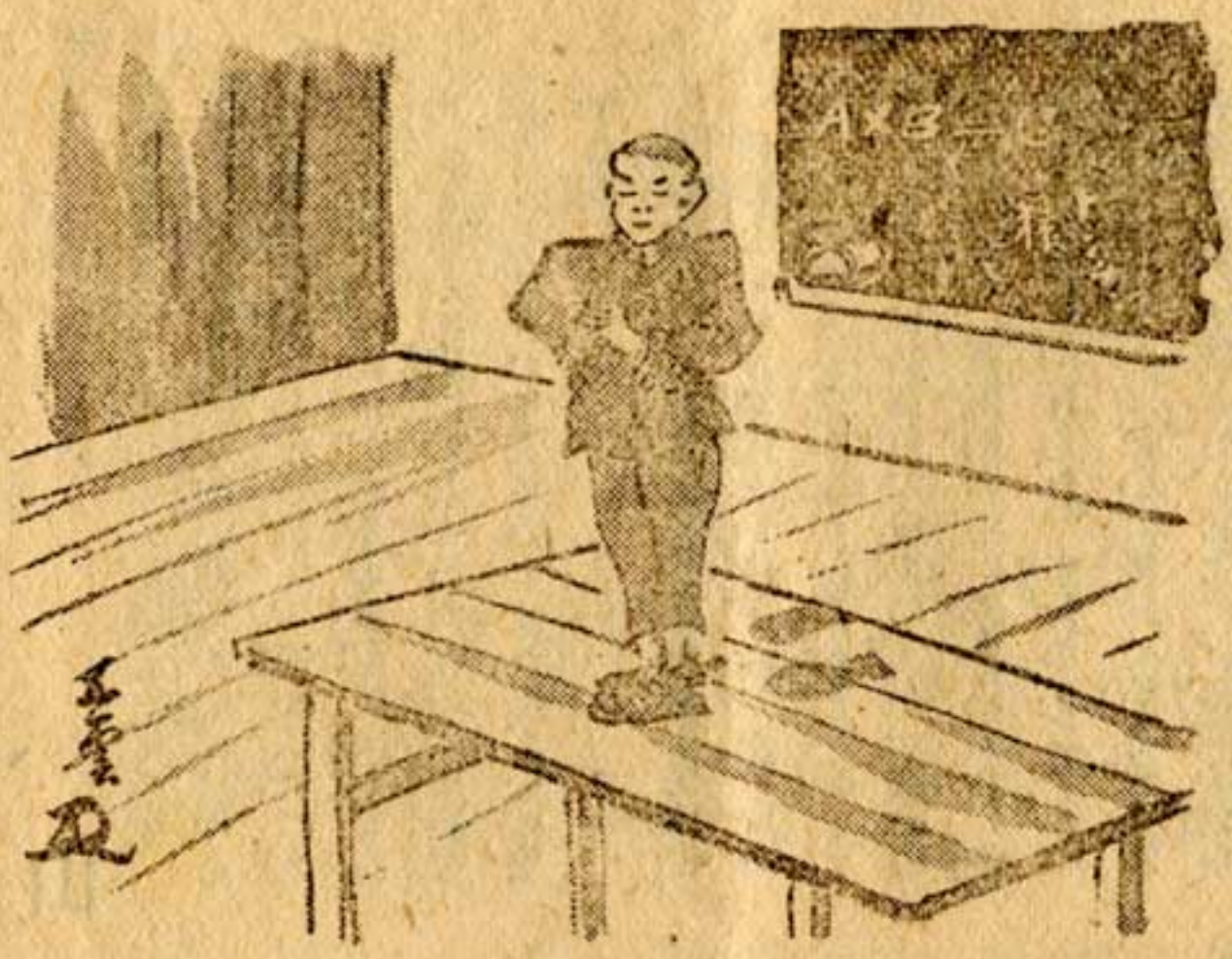
すると西郷隆盛を思はしめる樣な、平素謹嚴で有名な校長先生が聞きつけてやつて來ました。愈々本式に叱られるんだなと、恐る懼る首を縮めて、ギロチン豪にでも立つてゐる樣な思ひでゐると、

「どうしたね！大怪我で無くてほんとに良かつた。之に懲りて、もう無茶な事をするで無い。何事も油斷をすると躓く。窓の外を御覽。外を走るあの自動車も油斷をすると怪我をしたり、最悪の場合は即死する事も有る。自動車を運轉する人ばかりで無い。馬に乘つてゐる人でもそうである。どんな馬好きな人でも一日中乘つてゐるわけでは有るまい。乘つてゐる僅かな時間丈注意すれば過ちは無い筈で有る。之を思つたら、馬に乘つたら馬三昧、自動車を運轉してゐ

たら、運轉三昧となつて、外に心を脱らしては、いけない。馬三昧になり、運轉三昧になり、他念を混えぬのは馬を敬ひ、物を愛すると云ふ事、何事も其の物になり切る事だ。生徒は學校にゐると云つても一日精々五六時間——一日の何分の一になる、——其の僅かな時間、迂濶にせず、勉強三昧になつてこそ、生徒の本分を盡した事になるんだ、だから、何事も油斷せず、其の物に成り切つて一心不亂にやる事だよ」と別に叱る樣な事も無く今他から貰つて來たホヤ〳〵の菓子だよと云つて吾子の無事で有つたかの如く喜んで豚珍にお菓子を與れました。

叱られるとばかり思つてゐた矢先、先生持前の吃り聲の中にも、思ひ掛けぬ優しい慈父の樣な言葉に、嬉しいやら、安堵するやらで、一時の緊張が、ゆるんだのでせうか、嬉れし涙が思はず胸に込み上げて來ました。

側にゐた擔任の先生が「日本男子が泣く奴が有るか！」と豚珍を叱り乍らも、校長先生の思ひやりある言葉にやはり感激の瞼をしばたゝいてゐるのでした。（其の九）



休載にあたつて感謝と敬意を捧ぐ

「とんちん物語が出る樣になつてから、何と無く淨土が明るくなつた樣な氣がする」「僕は面白いから先づ一番先きに讀むよ」等と續き物の故なのでせうか、過分な御言葉をよい事にして、おこがましくも菲才を顧ず、いゝ氣になつて禿筆を振つて居りました處、最近、紙は頓に少くなる、人手、物資の都合で印刷發行の方も御存知の通り運れ勝ちで、編輯部の御苦心も並々ならぬを拜見して、血の滴る樣な貴重な紙面を、いつ迄も拙文を以て汚します事は眞に心苦く、此度全佛教僧侶率先徴用志願の驥尾に附し、私も直接生産增加の一翼として些か微力を盡す事になりましたので、未完成價に申譯有りませんが、此の機に當り心殘り乍ら休載させて戴き度く存じます。

恐らく此の本が發行されます頃は、何處かの工場の一角で、一工員としてハンマーを振つてゐる事で有りませう。

前後九回に渡つて變らざる御愛讀を戴きました事は筆者の眞に光榮と厚く御禮申上げますと共に、毎月の挿繪を執筆戴きました嘗つての中學の同窓、ノン坊俄畫伯事、辯護士辯理士、法學士、淺野昇君、拙寺檀家であり南畫の老大家、窪田五雲先生の奉仕御執筆、又この無名の筆者の拙文を思ひ切つて連載させて戴きました編輯部の絶大なる御好意に深く感謝と敬意を捧げて擱筆する者で有ります

「明照號」獻納資金寄附

淨土宗報國會での航空機「明照號」獻納資金募集に對し左記の通り本會經由で應募された。

○五圓　茨城縣多賀郡華川村芳之目炭礦　川波舜民

○九圓九十錢　大阪市東住吉區平野元町四ノ十　丸山元之助

死の嵐のたゞ中を

山田靈林

一

夢だつた、私が今見てゐたのは。私が今讃仰の切情堪へがたく死の嵐たけり狂ふたゞ中を念佛者はと叫んだそれも夢だつた――と、臥床の中でひとりごちながら、まだ曉のけはひもない夜色を見つめながら、靜かに味ひしめてゐたその夢を、今私はこの原稿紙に向ひつゝ心の中に深く見つめてゐる。

その夢それは――

そこびえのする眞暗な中であつた、突如として烈しい暴風が起つた、建物といはず樹木といはず、ぼきぼき折れて吹き飛ぶ、その凄じさ。私の身は幸にも地べたに堅く凍てついてゐて、吹き飛ばされる心配は感じなかつた。

だんだん暴風が猛烈となつて來た、そのとき一閃また一閃、鋭い電光が流れ飛んだ。電光に照らし出されて、遙か彼方に大きい山門が見えた、丹塗の壯麗な山門であつた。そして山門のところだけが、探照燈に照らし出されてゐるかのやうに、いつまでも明るかつた。

暴風はいよいよ烈しく、雨を含んで山門の屋根といはず樓閣といはず打ち突かつた。矢のやうに飛ぶ雨が、黄金色に輝いて來た、それは眞黄色の銀杏の葉が一ぱいの光を浴びて、暴風雨の中に卷き込まれ、數限りなく吹きつけられて來たからであつた。黄金の光を一ぱいに受けて照り映える丹塗の山門の麗しさ、そこには暴風の暗夜といふ感じなど全くなかつた。恍忽として私は眺め入つた。

このとき新たに私の眼に入つたものがあつた、山門の眞中の扉が靜かに明いて、かうがうしい內苑の光景が見えて來たのであつた、しかしそれは相形でない光景で、あれこれと名狀し得る光景ではなかつた。何ともいひやうのない氣もちで讃仰してゐた私の眼に、更にまた新たに映じて來たものがあつた、それは僧形であつた、墨染の法衣にねずみのお袈裟姿の僧形であつた。比叡山に祕藏する高僧圖繪に見るやうな、かうがうしいその僧形に、私は思はず掌を合せた。

掌を合せた途端、何たるいたましさぞ、私は暴風雨のたゞ中に霙さへ加はつて猛り狂ふ暴風雨のたゞ中に、骨の髓まで凍て入る寒さに震へてゐる自分を見出した。しかしながら私の眼は、光明に輝く中を靜かにゆく僧形を見つめてゐた。『あゝかうがうし

い僧形よ』『死の嵐たけり狂ふたゞ中を』『輝かしく靜かにゆく念佛者よ』と私は叫んだ、讃仰切々の情にわなゝき叫んだ。

——その叫び聲に呼び覺まされて、私の夢は破れたのであつた。

二

冷い暴風雨の中に、わなゝいてゐる自分の姿そのいたましい姿が夢から覺めれば覺めるほど、强く胸に感ぜられて來た。

冷い暴風雨はおろか、悽慘なる死の嵐、敵機盲爆の嵐か、吾等を襲はうとしてゐる今日である。敵機盲爆の悽慘なる死の嵐が猛り狂ふ日に、吾等はそのたゞ中に如何にあるであらうか、夢に見た念佛者のそれのやうに磐石のおちつきをもつて、光明に滿ち溢れる歩みを進めつゞけ得るであらうか。

苛烈なる盲爆、悽慘なる死の嵐、思ふだに慄然色を失ふ、吾等にはあらざるか。

敵機來襲、盲爆必至、戰局は既にその段階に入つてゐる。

備へあれば憂なし。吾等の備へは果して十全であるか。

備へといへば、吾等は直ちに兵備を思ふ。兵備はまことに、備への中の備へである。兵備に遺漏あらしめてはならぬ、國家は兵備增强のために、總力を集約集中してゐる。

總力である、總ての力である、何れを輕し何れを重しとすべき譯はない。總てこれを集約集中いたさねばならぬ。しかしながらそこにおのづから本末がある。本が大事である本、それは心力である。國民一人々々の心力である。これを集約集中に缺くるところがあり、その一人々々の心力に不健全なるものがあるに於ては、一切が水泡に歸し去るといふ、實に恐ろしい危備がそこに孕まれてゐる。

吾等の眇たる心力、大海の一粒沙にも及ばぬ眇たる吾等の心力、それが、大東亞戰爭貫徹の要機であることを、吾等は深く反省いたさねばならぬ。

吾等が心力は剛健であるかどうか。吾等が一人の心力がぐらついても、影響が全體に電波のごとく及ぶのである。

三

吾等は心力の剛健を思ふとき武士を思ひ、武士を思ふとき葉隱を思ふ。葉隱は實に人をしてその心力を剛健ならしむる、最も優れた書の一つである。

吾等には讀むべき祖師の親言親書がある。戰局が重大となればなるほど、それを日本的なる荒魂で領解いたすべきである。がその領解のための導きの書として、葉隱のもつ意義は決して少くない。

葉隱は心力を剛健ならしむる所以の道は、死を必するにありといふ。毎日々々、今日こそはと、討死の覺悟を極めて寢所より起き上れといふ。

必死の觀念、一日仕切りなるべし。毎朝心をしづめ、弓、鐵砲、槍、太刀先にて、すた〳〵になり、大波にかきさらはれ、大火の中に飛入り、雷電に打ちひしがれ、大地震にてゆりこまれ、數千丈の崖に飛込み、病死、頓死等、死期の心を觀念し、朝毎に懈怠なく死して置くべし。（第十一卷）

毎朝毎夕、改めては、死ぬ死ぬ、と常住死身になりて居る時は、武道に自由を得、一生落度なく家職を仕果すべきなり。（第一卷）

武士道といふことは、卽ち死ぬ事と見附けたり。（第一卷）

「武士道は死狂ひなり、一人の殺害を、數十人しても、仕かぬるもの」と直茂公も仰せられ候。本氣（正氣）にては大業（大戰果）はならず、氣違ひになりて死狂ひするまでなり。武士道に於て、分別出來れば、早後るゝなり。忠も孝も入らず、武道に於ては、死狂ひなり、この内に忠孝は自ら備るものなり。（第一卷）

葉隱の全篇を一貫する精神がこれである。

四

しかるに世の多くの武士達が、死に徹し切るべき最第一の修行を忘れて「金銀の噂、損德の考へ、内證事の話、衣裳の吟味、色慾の雜談」などに興じ、それをなさなければ、一座がしらけると、ほざく實情であつた。葉隱は痛くこれを嘆き、武士は身嗜みの一ついたすそれも、悉く皆これ討死のための營みであらねばならぬことを示して次のごとくいつてゐる。

士は毎朝、行水、月代、髮に香をとめ、手足の爪を切つて輕石にて擦り、こがね草にて磨き、懈怠なく身元の嗜みを專一とし丈も武具一通りは錆を附けず、埃を拂ひ、磨き立て召置き候。

身元を別けて嗜み候事、伊達のやうに候へども、風流の儀にてこれなく候。今日討死の覺悟を極め、若し無嗜みにて討死いたし候へば、平素の不覺悟もあらはれ、敵に見限られ、不心得の輕蔑しまるゝものなれば、老若共に身元を嗜み申したる事にて候。

事むつかしく、聞つひえ申すやうに候へども、武士の仕事は斯樣の事にて、別に忙はしき隙入る事も無之、常住討死の仕組にて篤と、死身に成り切つて奉公も勤め武邊も仕り候はゞ恥辱あるまじく、さるをその心掛なくして、欲得、我が儘ばかりにて日を送り、行き當りては恥をかき、それも恥とも思はず、我身さへ快く候はゞ何も構はずなどと、放埒無作法の行跡に成り行き候事、返すゞくも口惜しき次第にて、平素必死の覺悟これなき者は、必定死場惡しきに極り候。（第一卷）

といつてゐる。

五

尙ほ葉隱を讀んで、深く思はしめられることは「和」の精神である。和の精神がその武士達の身心に徹し、たゞ一つの鐵火と燃えあがつてゐる。次にあぐる言葉は、訓誡めいて迫力が弱いやうにも思はれるが、しかし深い反省へと吾等を推し進める親言である。

諸人一和して、天道に任せて居れば、心安らかなり。一和せざれば、大義を調へても忠義にあらず。

朋輩と仲惡しくかりそめの出會にも、顏出し惡しく、すね言のみ云ふは、胸量狹き愚痴より出づるなり。自然の時の事を思ひて、心に染まぬ事ありとも、出會ふ度毎に、會釋よく他事なく、幾度にても飽かぬ樣に、心を付けて取合ふべし。（中略）、但し壹僧、輕薄は見苦しきなり、これは我が爲にする故なり。（第一卷）

――葉隱を讀んでゐると、時局の現段階に思ひ合せて、さまゞのことが胸にひしひしと迫つてくる。

法語解説

驕慢心を誡む

——法然上人御法語（其二八）——

中村辨康

法語

げに〳〵しく念佛を行じて、げに〳〵しき人になりぬれば、よろづの人を見るに、みなわが心にはおとりたり淺間しくわろければ、わが身のよきまゝに、由々しき念佛者にてあるものかな。誰々にも勝れたりと思ふ也。この事をばよく〳〵意えてつゝしむべき也。

世もひろし人も多ければ、山の奥、林の中に籠り居て人にも知られぬ念佛者の、貴く目出たき、さすがに多くあるを、我が聞かず知らぬにてこそあれ。さればわが身のいみじくて、罪をも滅し、極樂へも參らばこそあらめ。偏へに阿彌陀佛の願力にてこそ、煩惱をも罪業をも亡ぼし失ひて添けなく彌陀ほとけの手づからみづから迎へ取りて極樂へ遣らせましますことなれ。

されば我が力にて往生することならばこそ我れ賢しと云ふ慢心をば起さめ。若し驕慢の心だにも起りなば、たちどころに阿彌陀ほとけの願には背きぬるものなれば、彌陀も諸佛も護念し給はずたりぬれば、悪魔のためにも惱まさるゝなり。かへすゞも驕慢の心を起すべからず。

（七箇條起請文、法語抄一三七、一三八、一三九）

解説

佛教では「慢心」と言ふことに五種の分類をして、これを誡めて居ります。即ち「慢」これは誰れでも持つて居る「我慢」であつて、一般には「慢心」の中に入れて居ない心でありますが。一に「等々心」とも云つて「等しき」を「等し」と云ふ心であります。謂ゆる「人並」と言ふこゝろでありまし「過慢」これは我の劣れるを反省しないで「他と等し」と考へて居ることゝろでありまし。から考へて居る人は殆んどと言つてよい程でせう。

「慢過慢」自ら劣れるにもかゝはらず、他よりもすぐれたりと思つて居ることゝろのことで、謂ゆる「自惚れ」であり、一寸鼻もちのならぬ域に達して居ります。

「驕慢」これは「慢心」を鼻の先にぶらさげて居る人のことで、自ら得たりとして居りましても、もう人は相手に致しません。

「増上慢」謂ゆる「傍若無人」と云ふもので、到底近寄ることは出來ません。常識では判斷の出來ない部類に屬する人で「誇大妄想狂」の一種と云つてもよいでせう。

この外に「卑下慢」と云ふ「逆效果」をねらつた「慢心」もありますが、昔は俗に

「自惚れと何とかのないものはない」とよく言ひましたが、大體は「過慢」か「慢過慢」かの内に屬して居て、自分に滿足して居るのであります。若し萬一にもそれが無くなりますとすつかり悲觀してしまつて「憂鬱症」にならぬともわからないでせう。これくらゐまでは先づ〳〵よい方ですが、その上の「驕慢」と云ふのになると、それは到底「宗教人」ではなく「信仰ある人」とは申されません。何となれば念佛の信仰には自ら頼むところがあるやうでは到底本ものになりかねるからであります。

然しながら私達は兎もすればこの「驕慢」になり勝のものであります。

初めの頃は本當に素直な氣持で他の人のことはかまはず一心に念佛して居りましても、やがて他と比較して見る心をおこし、同じ念佛者の仲間でも隨分ルーズな念佛をするものもあつて「これでも念佛信者か知ら」と疑ひたくなる人が多いことを發見いたします。イヤ殆んどと云つてよい程、多くの人々は念佛に執心して居ないらしく見えます。口でこそ念佛信仰のことを云々して居りましても、何ですか實際には念佛して居ない樣に見受けられるのであります。

然るに自分はかくも熱心にかくも執心に念佛を一生懸命に心がけて居るのであつて見れば、我ながら我に合掌したい位にも思はれ、私こそは他に勝つて居るところの、いみじき信仰家でありいみじき念佛者であると自覺され、知らず〳〵の中に「驕慢」の心が助長されて參ります。實に恐ろしいことですけれども、人間の通有性と申しませうか、誠に止むを得ない心狀であります。

然しながらこれはこの御法語に示されたる通り、自分の見聞が極めて狹いから

俳壇

名古屋　堀場　典雄

涅槃圖のかなしくもまた美しき

評　中七字だけでは平凡を免れないが更に下五字の觀察によつて相援け相補つてあまりがある。

朝鮮　三浦砂千子

室咲きの花にするどき疲れかな

評　「鋭き疲れ」は鋭い觀察である。

東京　山本　竹泉

寒念佛奉謝をすれば顔なじみ

評　此のユーモアに此の表現ふさはし。

岩國市　長岡　白朝

御つむりにカチと甘茶の杓の音

竹田村　米田　一聲

雪道の暮れて空腹思ふかな

京都　松村　城南

湖に映えてぞ野火のさかんなる

岡谷市　久保田　穣

黒い目の澄みてつぶらな風邪の子

豐中　三好　夏生

簾搦いて夕づく心冬の薔薇

東京　田邊　越正

陽あたりていよ〳〵しげしや雪平

浦和市　瀧川　信雄

ゆくりなく見そめたりけり雲雀の巣

千葉　高橋　秀郎

梅白し朝の煙のおされゆく

千葉　小宮　蒲柳

白梅にをろがむ母の老いにけり

東京　狩野　智祥

白梅の白の睨らみ清々し

栃木縣　大輪　清

富士の雪春めく空にそびえたつ

北海道　花田　順往

苛烈なる戰鬪しのぶ吹雪かな

高知縣　竹原　敎圓

風花に交りて散るや梅の花

高知縣　平野　雪女

星晴るゝ村を眞下に初詣

別府　渡邊　泉洞

薄雲に流れたりけり初日影

京都　藤田　清城

春の富士立つ國として敵機見ず

東京　坂口　康夫

殘雪を被りて出でし蕗の臺

千葉　小宮　蒲柳

四方山の殘れる雪や日が照れる

投稿規定

官製ハガキに一回二句以内「淨土」編輯部俳壇係あてに送ること、

であります。世には隠れたる善行者も相當に多いのであり、且つすぐれたる善行者程自分をかくして居るのであります。謂ゆる「自己宣傳」をしませんから世に知られて居ないのであります。元來人間は「自己宣傳」をしたがるものであります。然し自己宣傳をしたが る内はまだ不徹底をまぬかれません。本當の善行者、本當の念佛者、本當の信心深い人はむしろそれをかくして居ります。だから自分が知らないからと云つて、世に自分ほどの信心者は居ないであらうなどと思ひ上がつたならば、それは大間違いなのであります。

しかも自らの至らなさを痛感したればこそ信仰を求めたのでありますから、自分を頼むところはすこしも有りません。若し少しでも自力ごゝろがあれば信仰には入れないのであります。

一體私達に私達みづからの力と云ふものがあるでせうか。一應はあるやうにも見えますが本當にはないのであります。

例へば今私は私の手を見て居ると假定します。自力で見て居るのでせうか、他力で見て居るのでせうか。一應自力で見て居るとは言へます。何となれば見る心なくしては見えないからであります。

然し太陽の光がなく電氣の光がなかつたら見えるでせうか。眞暗なくらやみの中で見えるでせうか。見えません。即ち他力なくしては見えないのです。然らばこちらの見やうとする心と他の光線との自力他力相依つて「見る」と云ふ事實があるから、自力他力相半ばして居ると言つて言へないことはありません。然しながらこちらの「見る」力も實には食物に依つて養はれた身體の力であります。しかもこの身體の力は皆な悉く天地の力に依つたものでありますから、私の中に有る力の一切合切は皆な天地の力の集積に過ぎません。即ち他力の集積であり他力の一分を分けられたものが自力であるのですから私の中には本當の自力と云ふものは寸毫もないのであります

この故に此の世の中には自力なるものは一つもないことを知るべきであり、隨つて自力心を起すのは認識不足から來た思ひあがりであつて不徹底であります。

一切を如來様にまかせて如來様のおん力を得つゝ一心に御國の爲に働かせて頂いて居るのでありますから、そこに何の思ひ上りもある筈がありません。それでこそまた本當の信仰者の心意氣でもあります。

郁芳管長猊下名號御執筆

淨土宗日常勤行式

須價八十五錢（送料共）
折本、縦五寸五分、横二寸五分

本文二號活字、總假名ヅキ、特に一般信徒用として編纂されたもの。

申込所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一一八七番

御住所　芳名

中村辨康著

新刊

信仰問答

賣價三圓十五錢
送料廿四錢

「淨土」創刊以來連載の「信仰相談」から大切な問題ばかり約二百を選び、系統的に配列して一冊の書物とした。誰もが知りたい難問疑義に對して明解を與へた興味深い活きた信仰案内書である。それは問ふ者が切實な信仰上の惱み、疑ひをそのまゝぶちまけ答へる者が一々親身になつて懇切な指導をなしてゐるからである。從つて本書は最も平易な佛教讀本であり、また佛教辭典でもある。一讀して自づと信仰の指針が與へられる。

發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

編輯後記

◇出版界の相貌も一變することゝなりました。すべてのものが戰ふ姿に於て刻々變化してゆくのは當然でせう。その中にあつて本號が多少なりと內容を增すことが出來たのを有難く思つてゐます。

◇四圓がいよ〳〵緊迫をつげるに從つて精神力の高揚が要請され、信仰の底力を發揮することが最も大切になつてきます。これに應じて當會でもなし得るだけの努力をいたしてゐます。御後援下さい。

◇但し發刊の遲れたことはなんとも申し譯なく存じてゐます。各種の事情が重なつてゐるためで、近くもとに復したい心算でゐます。

◇吉田絃二郎、山田靈林、子母澤寬各先生にはお忙しい所を、御指導下され厚く御禮申し上げます。

◇郵稅が改正になりましたので、送料をお拂込の際、何卒御注意下さるやうお願ひします。（村瀨）

淨土　四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十九年三月三十日印刷納本
昭和十九年四月一日發行
（定價十二錢）

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼發行人　眞野正順
東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人　赤尾光雄
東京都牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三（東東一）
印刷所　大日本印刷株式會社
配給元　東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社
發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館內
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「淨土」購讀規定

定價　㊐金十二錢（送料二錢）

會費　金一圓六十八錢（送料共）
一ヶ年

振替拂込みはすべて十錢增のこと